

# 伊勢物語の高安の女

## —二十三段第三部の二つの問題—

山本登朗

一

伊勢物語二十三段は「筒井づつ」の段としてよく知られた章段である。その第二部の末尾で「風吹けばおきつ白波たつた山」といふ歌を女が詠むのを聞いて心を打たれ、「河内へも行かず」なつた主人公は、しかしながら次の第三部の冒頭では、「まれまれ」に「河内の国、高安の郡」にやつて来たと言られてゐる。その第三部の本文を、定家本（天福本）によつて次に掲げておく。

まれまれかの高安に来て見れば、はじめこそ心にく（く）も作りけれ、今はうちとけて、手づから飯がひ取りて、このうつはものに盛りけるを見て、心うがりて、行かずなりにけり。さりければ、かの女、大和の方を見やりて、君があたり見つつををらん生駒山雲な隠しそ雨はふる

とも

と言ひて見出だすに、からうじて、「大和人来む」と言へり。喜びて待つに、たびたび過ぎぬれば、

君来むと言ひし夜ことにすぎぬれば頼まぬものの恋ひつつぞふる

と言ひけれど、男、すまざるにけり。

この第三部の本文中、定家本に「今はうちとけて、手づから飯がひ取りて」とある部分は、広本系の阿波国文庫旧蔵本（現宮内庁書陵部蔵）では「今はうちとけて、髪を頭に巻き上げて面高なる女の、手づから飯がひを取りて」となつてゐる。ここに加わつてゐる定家本にない記述（傍線部）は、広本系の諸本や塗籠本、真名本にも、さまざまに形を変えながらほぼ共通して見られる本文だが、その異同を除けば、この第三部について大きな本文の異同は他には見られない。なお、定家本では「は

一

じめこそ心にくもつくりけれ」となっていて、通常「心にく」の後に「く」の一文字を補って理解しているが、この点は広本系諸本や塗籠本等の主要諸本もおおむね同じであり、一部の伝本を除いて相違は見られない。

この第三部の前半では、主人公の男が「まれまれ」に「かの高安」に来てみたものの、その際に女の下賤なふるまいを見て「心うがりて」行かなくなったという内容が語られている。後述する「けこ」の語をめぐる問題をのぞけば、ここに特に解釈上困難な問題はないように、ひとまずは思われもする。

しかし、伊勢物語を描いた絵巻や伊勢物語の絵入り本などの、文字以外の資料を参看すると、その事情は異なってくる。原本が鎌倉時代に描かれたと考えられる『異本伊勢物語絵巻』（模本が東京国立博物館に現存）をはじめ、室町時代の『小野家本伊勢物語絵巻』、室町時代末期のニューヨーク・パブリックライブラリー所蔵『スペインサーコレクシヨン本伊勢物語絵巻』、そして嵯峨本以下の絵入り版本に至るまで、数多くの本の中で、この第三部前半は、さまざまな形で絵に描かれてきた。それらさまざまな絵の中で、主人公は一貫して、室内にいる高安の女の子を戸外から、ひそかに「かいまみ」しているように描かれている（図1・嵯峨本伊勢物語参照）。すなわち、これらの



図1

絵から考えるかぎり、伊勢物語二十三段の第三部は、鎌倉時代から江戸時代のはじめまで、一貫して一種の「かいまみ」の場面として理解され、享受されてきたと考えられるのである。

伊勢物語には、古くからきわめて多くの、そしてさまざまな性格の注釈書が作られてきたが、それらには、「まれまれ」「かの高安」に來た主人公がどのような位置から女のふるまいを見ていたかについて、特に何の注記も記されていない。おそらくは、この第三部前半を一種の「かいまみ」の場面として読み取るといふ理解が、長期間にわたってあまりにも一般的であった

ために、それは、注釈書の中にことさらに注記されることもなく、いわば言わずもがなの共通認識として、そのまま受容され続けていたと考えられる。この場面の、前述のような「かいまみ」の場としての享受の姿を、我々は、絵画資料以外からはまったく知ることができない。絵はしばしば、このように、ある時代の物語の享受の姿を、文字で書かれた古注釈以上に、ありありと現代に伝えているのである。

## 二

絵画資料によって知られる二十三段の第三部前半に対するこのような理解は、しかしながら、現代の一般的な理解とは大きく異なっている。たとえば片桐洋一氏編『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』（角川書店・昭和五〇年）では、この部分分は同氏によって次のように訳されている。

たまたま、あの高安に来て、女を見ると、はじめのうちこそ、男の心を引きつけるように奥ゆかしく粧まをいをこらしていたのだが、今はもうすっかり気を許して、みづからしゃもじを取って、飯椀に盛りつけていたのを見て、すっかりいやになって、通わないようになってしまった。

「今はもうすっかり気を許して」という傍線部の記述から知られるように、この読解では主人公は女の目の前におり、女は主人公に見られていることを十分承知のうえで、「しゃもじ」を取って飯を盛っている。この理解は、そのまま現代の一般的な読みであると言つてよい。

そもそも、この部分の本文は「はじめこそ心にくくも作りけれ、今はうちとけて」と記されていた。そこでは、言うまでもなく、「はじめ」と「今」が対照的に、対をなすような形で語られている。「はじめ」のころはわざと上品に装っていた女が、「今」はうちとけて主人公に気を許し、上品に装うことをやめて素顔を見せるようになったと、本文は語っている。この本文そのものによるかぎり、主人公は女の素顔のふるまいを「かいまみ」によって知るのではなく、女の目の前にいて、女の「うちとけ」た行動をまのあたりにしたとしか考えられない。あくまでも本文の正しい読解をめざすかぎり、この部分は、さきほど『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』の現代語訳で見たような、現代の一般的理解に即して考えられなければならないはずである。

本文にはそのように記されているのに、それではなぜ、かつてこの部分は、主人公が高安の女をひそかに「かいまみ」する

場面として理解されていたのだろうか。その最大の原因になつたと思われるのは、伊勢物語二十三段とはほ同内容の話を語る大和物語百四十九段の存在である。周知のように、同じ歌を用いたほぼ同内容の類話とはいっても、伊勢物語と大和物語の話の内容や表現にはさまざまな違いがあつて、その結果、両者の雰囲気は大きく異なつたものとなつてゐる。いま問題にしてゐる伊勢物語二十三段の第三部前半に相当する部分は、大和物語では次のように記されている。

かくて月日多く経て思ひやるやう、つれなき顔なれど、女の思ふこと、いとみじきことなりけるを、かく行かぬをいかに思ふらむと思ひ出でて、ありし女のがり行きたりけり。久しく行かざりければ、つつましくて立てりける。さてかいまめば、われにはよくて見えしかど、いとあやしきさまなるきぬを着て、大櫛おほくしをつらぐしにさしかけてをり、手づから飯いひもりをりける。いとみじと思ひて来にけるまゝに、行かずなりにけり。(下略)

傍線部に述べられているように、大和物語では主人公は、「久しく行かざりければ、つつましくて立てりける」、すなわち、なごらく訪問しなかつた遠慮から門内にすぐに入ることができず、しばらく屋外にたたずんで、そこから女の様子を「かいま

み」によつてうかがつてゐる。こちらでは主人公は、まぎれもなく「かいまみ」をしているのである。大和物語のこのような本文と伊勢物語のそれを重ね合わせて理解しようとしたことから、伊勢物語二十三段のこの場面についての、上述のような理解が生まれたのではないかと、まずは考えられる。

次に考えられるのは、伊勢物語二十三段第三部の直前に記されている、俗に「河内越え」と呼ばれて有名な第二部の存在である。そこでは主人公は、「前栽の中に隠れ」て、ひそかに女の様子をうかがつてゐた。同じように主人公が見た大和の女のふるまいと、それとはまったく対照的な高安の女のふるまい。このふたつの場面を対照的に考えることによつて、前者の「かいまみ」をそのまま後者の場面にも設定し、主人公はどちらの場面でも同じように、屋外からひそかに女の様子をうかがつたのだと、かつて人々は考えたものではなかつたか。いまたとえば、嵯峨本伊勢物語の「河内越え」の場面(図2)を、さきに見た高安の場面(図1)と見比べてみれば、両者がかつて対照的な場面として人々に理解されてゐたことが、容易に推測されるのである。

ちなみに、「まれまれかの高安に来て見れば」という本文中の「来て見れば」という表現は、この当時、「来て、そして見



図2

ると」という意に用いられていたと考えられる。「試みに」  
 してみる」という、「みる」を補助動詞的に用いる用法は、伊  
 勢物語の時代にはまだ存在しておらず、後代にあっても、古典  
 語としては認識されていなかったと、おおむね考えてよい。「来  
 て、そして見ると」という言い回しは、かつての「かいまみ」  
 的理解にも現代の一般的理解にも、どちらにも適合する表現で  
 はあるが、かつての読者は、この言葉によって、ものかげから  
 ひそかに女の様子をうかがい見る主人公の姿を、ごく自然に想  
 定したのではなかったかと考えられる。

三

伊勢物語二十三段の第三部前半を、このように「かいまみ」  
 の場面として理解していたかつての読解から、それではないつ、  
 この部分の読みは現代の一般的理解へと変わっていったのだら  
 うか。前述のように、注釈書に記されることのないことがらだ  
 けに、その変化の実態を探ることは必ずしも容易ではないが、  
 たとえば昭和二十七年に刊行された『新講伊勢物語』（吉沢義  
 則監修・風間書房）の次のような記述、特に傍線部から、その  
 ころすでに、この部分の読解が現在の一般的理解と同じ読み  
 変わっていたことが推測できる。

その後、ごくたまに高安の女の所に来てみると、女は初め  
 のうちこそ、奥ゆかしく慎んで化粧をしてゐたが、今では  
 すつかり気をゆるして、自分で杓子を持つて、家の中に召  
 使ふ者の食器に飯を盛つてゐたのを見うけて、なさげなが  
 つて、通はなくなつてしまつた。

だが、この場面对するこのような把握が、実はこれよりも  
 はるかに以前からおこなわれていたことが、やはり絵画資料に  
 よつて、はっきりと確認できるのである。鉄心齋文庫所蔵の「伊  
 勢物語扇面書画帖」は、伊勢物語中の和歌四十六首を一首ずつ

書いた四十六枚の扇面と、その和歌の章段の情景を描いた四十六枚の扇面を、折り本の各丁に、歌を上、絵を下に各一枚ずつ貼り付けたものだが、別紙に記載されている和歌の筆者の官職名から、寛文九年（一六六九）以前に和歌が記され、同じころに絵も描かれたことが推定される（展観図録『鉄心斎文庫所蔵・

伊勢物語とその周辺』同文庫・平成十五年）。その四十六枚の絵の扇面の中に、二三段の第三部を描いたもの（図3）が含まれているが、そこには、主人公が室内に座り、その目の前で、高安の女がいくつかの器に飯を盛りつけている図が描かれている。現在一般におこなわれている場面理解は、実は江戸時代初期の寛文九年ごろに、すでにこのようにおこなわれていたのである。

さらに、同様の場面理解の

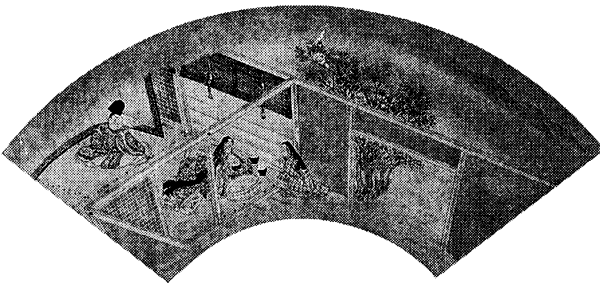


図3

痕跡は、より古く、室町時代にまでさかのぼって確認することが可能である。中世小説『窓の教』は、室町時代中期の成立と推定され、もとは絵巻物であったかとも考えられている（市古貞次『未刊中世小説解題』昭和一七年・楽浪書院、その他）。

その内容は、主人公である三位の中将が、理想の妻を求めて一年間に十二人の女性を遍歴し、ことごとく失望して出家を考えたが、最終的には帝から女四宮を賜るというものである。その十二人の女性のうち、三月に通っていた裕福な常陸守の娘は、最初は優雅にふるまっていたが次第に卑俗な本性をあらわし、主人公は嫌気がさして通わなくなってしまう。その部分を、以下に示しておく。（本文は内閣文庫本により、田島一夫校注『新日本古典文学大系 室町小説集・下』の翻刻を参考にした。）

さればよ、はじめの日こそ心にくくも作りつれ、いやしき者をそば近く集め、いとかひがひしく手づから飯匙いひぢとり、けこにもりつつ、明け暮れのいとなみを、さながら御前みまへに並べつつ、御覧じならはぬふしをのみまねば、これまたこらへがたく、一夜もつらくて、浮寝の床に立ち返り、またもゆかずなり給ひけり。

傍線部を見ればすぐわかるように、この部分は、あきらかに、いま問題にしている伊勢物語二十三段の第三部前半をふまえて

書かれている。というよりもむしろ、この三月の女の話自体が、伊勢物語二十三段第三部前半の翻案、ないしはパロディーとして作られているのである（探覧子「窓の教」について―創作意識と典拠―、『古代中世文学論考 第八集』新典社・平成一四年）。ここでは、裕福な常陸守の娘は、伊勢物語の高官の女と同じく、「手づから飯匙」をとっているが、そのような娘の働きぶりを作者は「明け暮れのいとなみ」、すなわち日々の仕事と呼んでいる。いわば家事労働に属する、優雅とはいえない「御覧じならはぬ」ふるまいの数々を、主人公は「御前」に「まべ」られて「こらへがたく」、伊勢物語の主人公と同じように「またもゆかず」なっただけであった。（『新日本古典文学大系 室町小説集・下』の注では「明け暮れのいとなみ」が「毎日の仏事」と解釈されているが、それでは前後の文と意味が続かない。）

ここで注意されるのは、この常陸守の娘が、主人公三位中将の「御前」で、「手づから飯匙」をとっているという事実である。内閣文庫本『窓の教』には挿絵も描かれていて、それらの絵の図柄は室町時代の絵巻物にまで遡ることができると考えられている（市古貞次前掲書）。その絵は『新日本古典文学大系 室町小説集・下』にも収められているが、この場面の挿絵を見ても、主人公は室内に座り、その近くで女が飯をよそって

いる。この部分に見られる、原拠の伊勢物語にきわめて密着した翻案ぶりから考えて、『窓の教』の作者は、伊勢物語二十三段の第三部前半を、「かいまみ」の場面ではなく、あくまでも、主人公の目の前で女が飯を盛る場面として理解していたと考えられる。現代の一般的理解と同じ場面把握の歴史は、実は意外に古く、室町時代にまでさかのぼることができると考えられるのである。

もともと、これらは、あくまでも例外的な事例であって、この場面に対する当時の一般的な理解はあくまでも、前に見た嵯峨本のように、ここを「かいまみ」の場面として把握するところにあった。嵯峨本は、江戸時代を通じて出版されたおびただしい種類の絵入り版本の最初でもあり、また、特に前期の絵入り本の規範として大きな影響力を持ち続けたが、それら後続の絵入り本でも、この二十三段第三部前半は、さきに見た鉄心斎文庫蔵「伊勢物語扇面書画帖」のような特別な例外を除いて、嵯峨本とほぼ同様の図柄に描かれており、一部の相違はあっても、そこには、いま問題にしているような場面理解にかかわる変化は見られない。前述のように注釈書には、この点についての記述がなく、文字資料の手がかりも事実上皆無に近い。今はただ、二十三段第三部前半に対する理解は、「かいまみ」の場

面として把握する読み方から、現代の一般的理解へと次第に変化し、現在に至っていると云うほかないのである。

#### 四

以上、伊勢物語二十三段の第三部前半の理解について、二種類のまったく異なった場面把握と、その両者の変遷について考えたが、この部分には、もうひとつ、すでに以前から指摘されてきた、「けこのうつつはものに盛りけるを見て」という部分の「けこ」という語の解釈をめぐる問題が存在する。

まずは、この「けこ」の語の解釈の歴史を概観するために、江戸時代初期までのおもな注釈書の該当部分を列挙しておく。(以下、読解の便のため、句読点・濁点・読み仮名等を加えるなど、表記や本文を適宜改めている。)

〔書陵部本和歌知頭集〕(宮内庁書陵部蔵伝為氏筆本による。)

：「けこ」とは、家のうちに定まりたる人かずなり。：

〔十卷本伊勢物語注〕(『鉄心斎文庫古注釈叢刊 一』の影

印による。)

：「飯貝トリモチテケゴノ器ニ盛ル」トハ、必ワガモル

ニハ非ズ。懸養ノ物共ニ、ソノ宛物・相節ヲ計。宛義也。  
：他説ニ云、「食子」トハ竹ニテクミタルヒゲ籠也。「イガヒ」トハ海ニアル物也。ソノ貝ヲ業平ノ結構ニモルヲ「イガヒトリモチ食子ノ器ニモル」ト云也。サレドモ実義ハ配分ノ義也。：

〔伊勢物語愚見抄〕(京都大学国語学国文学研究室蔵大永二年書写本による。)

：「けこ」は家子也。家の中に召し使ふ者のうつつは物に、てづから盛りける也。：

〔伊勢物語肖聞抄〕(文明十二年本。宮内庁書陵部蔵伝肖柏筆本による。)

：「てづからいひがひとりて」、古注には、実にとるにあらず、成敗する心也と云々。当流には、此事誹諧也と。成敗するにても幽玄ならず。只其ま心得べし。

〔伊勢物語闕疑抄〕(京都府立総合資料館蔵法眼祐孝筆本による。)

：「けこのうつつは物」、「家子」と書きたり。

右に列挙した注釈のうち、冷泉家流古注を代表する注釈書である『十卷本伊勢物語注』は、女が自分で飯を盛ったと記されていることを、比喩的な表現であって実際に盛ったのではない



と説明する。冷泉家流の古注に類繁に見られる特異な解釈だが、比喩的表現の裏にある事実は、「懸養ノ物共ニ、ソノ宛物・相節ヲ計宛」こと、すなわち「めんどうを見ている一家眷属の者たちにそれぞれの取り分をはからって与える」ことだと『十卷本伊勢物語注』は言う。注するまでもない事項として直接の説明は記されていないが、『十卷本伊勢物語注』が「けこ（けこ）」の語を「懸養ノ物共」すなわち自分が養っている一家眷属の意に理解していることは明白である。なお、『十卷本伊勢物語注』の引用部の後半には「他説」として、「けこ」を「竹ニテクミタルヒゲ籠」すなわち竹を組んで作ったひげ籠と解する説が紹介されたうえで否定されているが、これは「いひがひ」と「い貝」、「ひげこ」と「けこ」を強引に結びつけたもので、いまここで特に問題にする必要はない。

『伊勢物語肖聞抄』などに示されている宗祇の解釈は、物語を表面的に読むだけでなく裏に隠されたものをも探るといふ冷泉家流古注の方法を継承しつつ、背後の事実ではなく物語の表現意図を考える方向へと読みを転換させたものである。ここでは、「伊勢物語肖聞抄」は、「実にとるにあらず、成敗する心也」すなわち「実際に自分が杓子を取って飯を盛るのではなく、その仕事の指図をするという意味である」と古注の説を紹介した

うえで、そのように解しても結局「幽玄」にはならないので「当流」はこれを「誹諧」すなわち意図的な滑稽表現と考える、と言う。ここでも、特に説明がない以上、「けこ（けこ）」は、古注と同様、「家子」すなわち一家眷属の者たちの意に解されているはずである。

特異な読解を見せる二種の注釈についてまず触れたが、この二種も含めて、江戸時代初期までのおもな注釈はすべて、「けこ（けこ）」を「家子」すなわち一家眷属の者たちの意に捉えていると考えてよい。最初の『書陵部本和歌知頭集』の「けこ」とは家のうちに定まりたる人かずなり」という言い方はわかりにくい、これはおそらく、複数の器に飯を盛っている光景を前提にして、その器の数が、この家にある一定の「家子」の数と一致していることを、このように言ったものであろう。この場合、「けこ（けこ）」という語そのものの意味は注釈不要として説明されず、ただ文脈的な意味だけが、このように説明されていると考えられるのである。

この「けこ（けこ）」の語にまったく新しい解釈を示したのは、賀茂真淵の『伊勢物語古意』であった。そこには次のような注記が記されている。（寛政五年・一七九三版本による。）

…「けこ」は、或説に家の子にて家人奴婢の事といへるも

理りなきにあらねど、古本に「餼子」と書、万葉にも「家  
にあれば筥に盛る飯を」ともあれば、飯餼の器てふ意也け  
り。

ちなみに、契沖の『勢語臆断』の享和三年（一八〇三）版  
の該当部には、頭部欄外に、次のような補注が加えられている  
が、これはこの版本を編集した田山敬義が、おそらくは右の『伊  
勢物語古意』を見て補ったものである。

敬義云、けこ、或説、家子<sup>ケコ</sup>にて徒者<sup>ズカ</sup>也。又説、筥子<sup>ケコ</sup>、飯も  
る器なり。筥子にしたがふべし。

契沖は元禄十四年（一七〇一）に没しているが、『勢語臆断』  
の本来の注記には、この部分に、ただ大和物語の前掲部が引用  
されているだけであり、契沖自身は、おそらくは中世以来の「家  
子」説に、何の疑問も持っていなかったと考えられる。伊勢物  
語二十三段の「けこ」を「飯餼の器」すなわち「筥子」の意に  
解したのは、あくまでも賀茂真淵が最初であり、その新説は、『伊  
勢物語古意』に明記されているように、「古本」すなわち真名  
本の「餼子」という表記に導かれたものだったのである。

## 五

その真名本には、問題の部分が次のような表記で記されてい  
る。

俚彼高安爾往而見者、最初社襄毛作計礼、今者打解而髮乎  
卷上而、自飯匙乎取而、餼子之器爾盛計流乎見而、：

真名本には、「髮乎卷上而（髪を巻き上げて）」という、異本  
系諸本に共通して見られる本文も含まれているが、それはとも  
かくとして、ここにはたしかに「餼子之器」という表記が用い  
られている。

この「餼子」という表記は、たとえば室町時代初期の書写と  
される『大東急記念文庫本・十卷本伊呂波字類抄』や、文明十  
六年（一四八四）成立の『温故知新書』、永正七年（一五一一）  
から天文十九年（一五五〇）までの間に成立したとされる清原  
宣賢の『塵芥』（安田章『塵芥開題』（京都大学文学部国語学国  
文学研究室編『塵芥』臨川書店・昭和四十七年）などの古辞  
書に、次のように掲載されている。

〔大東急記念文庫本・十卷本伊呂波字類抄〕（人倫・付鬼  
神類）… 驗者<sup>ケンシヤ</sup>、餼子<sup>ケコ</sup>、家口也、遺唐使…

〔温故知新書〕（ケ・気形部）… 淑叔人<sup>ケシニシ</sup>、餼子<sup>ケコ</sup>、傾城<sup>ケイセイ</sup>…

〔塵芥〕（人倫門）…兄弟、榮<sup>ケイ</sup>独、淑<sup>ケイ</sup>叔人、下手人、餼<sup>ケコ</sup>子

これらの辞書では「餼子」の語は、それぞれの分類項目や前後に配されている語を見ればわかるように、人間のさまざまなあり方のうちのひとつの姿を言う語として掲載されているのであって、けっして食器の意味で掲載されているのではない。そもそも、それほど一般的だったとは考えられない「餼子」の語がこれらの辞書に掲載されるもとなつた出典は、真名本伊勢物語であつた可能性がきわめて大きい。伊勢物語の真名本には、江戸時代以降にさかんに用いられ現在も伝本が多く残っている種類の他に、使用文字の異なる別の真名本が古く存在したことが、源氏物語の注釈書『河海抄』中の引用によつて知られているが、そのどちらであるかはともかくとして、おそらくは真名本伊勢物語を出典として、「餼子」の語はこれらの辞書に、一家眷属の者たちをさす言葉として掲載されたと考えられる。賀茂真淵は真名本の「餼子」という表記に導かれて「けこ」を食器と見る新説を提唱したが、その「餼子」は室町時代には、一家眷属をさす言葉と考えられ、その意味に即して分類されて『十卷本伊呂波字類抄』『温故知新書』『塵芥』などに掲載されていたのである。

さらにさかのぼつて、平安時代末から鎌倉時代初期にかけて成立した『類聚名義抄』の観智院本や鎮国守国神社本にも「餼」の字が収録され、観智院本では「餼」に「ケコ」、鎮国守国神社本では「餼子」という熟語に「ケゴ」という和訓が示されている。これらと伊勢物語真名本の前後関係などは不明と言わざるを得ないが、そもそも「餼」の字は、『古語大辞典』（中田祝夫編監修・小学館・昭和五八年）の「けこ（餼子）」の項の「語誌」（岡崎正継執筆）に指摘されているように、食物を贈る、ないしは贈つたり支給したりする食糧という意に用いられる語であつて、器という意味とはいっさい無関係である。当時の人々がこの字を、食物を支給して養つている一家の家族や眷属の者の意にあてはめて、「けこ（けこ）」という語の表記に用いた可能性はきわめて大きいと言わねばならない。

なお、『大漢和辞典』（諸橋轍次・大修館書店・昭和三四年）は、「餼」の項に「餼子」という熟語を掲げ、用例をまつたく示さずに「古、食物を盛るに用ひた器。笥籠」と語義を述べるが、それは賀茂真淵以降の伊勢物語真名手の解釈にそのまま従つたものと考えられる。

一家眷属を言う「けこ（けこ）」の語は、竹取物語に、  
一人の男、文挟みに文をはさみて申す、「しかるに、緑い

まだ賜はらず。これを賜ひて、わろきけこに賜はせむ」と言ひて、ささげたり。

と用いられている。また『角川古語大辞典』（中村幸彦他編・角川書店・昭和五九年）には、「けこ」は家子なり」という頭昭『散木集注』の用例も指摘されており、それ以後の例も散見する。それに対して、食器の意の「けこ（筥子）」の語例は、いま問題にしている伊勢物語二十三段を除けば皆無と言つてよいほど見出されていない。

竹岡正夫氏の『伊勢物語全評釈』（右文書院・昭和六二年）は、さきに見た『古語大辞典』（小学館）の「語誌」等を引いて、伊勢物語二十三段の「けこ（けこ）」を、家族や眷属の者の意に解すべきであると主張する。二十三段に対する竹岡氏の解釈や見解には従いたい点も多いが、この「けこ」の語意に関しては、その結論は妥当と考えられる。また、片桐洋一氏の、さきに見た『鑑賞日本古典文学 伊勢物語・大和物語』（角川書店・昭和五〇年）や『校注古典叢書 伊勢物語』（明治書院・昭和四六年初版）の旧来の版では、「けこ」は食器の意に解されていたが、平成十三年に刊行された『校注古典叢書 伊勢物語』の新装版では、「けこ」に「家子。従僕」という頭注が付けられており、旧版とは所説が変わっている。これもまた、妥

当な判断と考えられるのである。

## 五

ちなみに、本稿前半で検討した中世小説『窓の教』には、「けこ」の語が次のように用いられていた。

さればよ、はじめの日こそ心にくくも作りつれ、いやしき者をそば近く集め、いとかひがひしく手づから飯匙いひがとり、けこけこにもりつつ、明け暮れのいとなみを、さながら御前みまへに並べつつ、…

『時代別国語大辞典・室町時代編』（三省堂・昭和六四年）には、「けこ（筥子）」という項目が「食物を盛る器」という説明とともに設定され、そこにはこの『窓の教』の例だけが掲げられている。それに従えば、この『窓の教』の例は、食器という意味の「けこ（筥子）」の語の、現在知られるもつとも古い用例ということになる。しかしながら、さきほど検討したこと考えてみても、賀茂真淵よりはるかに以前の室町時代における、食器の意の「けこ（筥子）」の語の存在は、きわめて疑問であると云わねばならない。

前にも述べたように、この『窓の教』の内閣文庫本には絵が

加えられており、その図柄は室町時代の絵巻物にまで遡ることができると考えられている。いま、問題の部分を描いた絵を見ると、飯を盛っている女性と主人公である三位の中將たちがいる部屋の前の濡れ縁に、家来とおぼしき人達が四人描かれ、そのうちの一人が子どもを両手で室内に差し出すようなしぐさをしていて、その近くには「このこにも、くだされよかし」という画中詞が記されている。それと対応するように、飯を盛っている女性の近くには「あのこにも、まいらせん。御こきたまへ」という画中詞が見える。濡れ縁に集まっている家来たちの様子やこれらの画中詞によれば、女性は夫の三位の中將のためではなく、家来や従者たちのために飯を盛っており、それに加えて、画中に描かれた子どもにも飯を与えようとしていると考えられる。事実、女性の前には飯が入っている二つの大きい容器のほかに、小型の器が二つ並べられ、それとは別に女性はある一つの小型の器を手に持って、いまそこに飯を盛ろうとしている。飯を盛る女性の前に複数の器を並べるのは、本稿前半で見たいくつかの絵入り本や絵巻すべてに共通する描き方であり（図1・図3参照）、そこから「けこ」が「家子」の意に解されていた事実を知ることができるが、この絵を見るかぎり、女性はこのこでも、「笥子」ならぬ「家子」すなわち一家眷属のために、

次々と飯を盛っていると考えざるを得ない。

だとすれば、「かひがひしく手づから飯匙いひかとり、けこにもりつつ」と記されているその「けこ」も、「笥子」すなわち食器ではなく、「家子」すなわち一家眷属の者たちの意であって、「けこにもりつつ」とは、「一家眷属のために次々と」飯を盛っている様子を言っているのではないかと考えられる。かくして、中世小説『窓の教』には、「笥子」の語例は存在しなかったと考えられるのである。やはり賀茂真淵の『伊勢物語古意』より以前には、食器の意の「笥子」という語は存在しなかったと言わねばならない。

## 六

以上、伊勢物語二十三段の第三部の二つの問題について考察してきた。すなわち、前半では、高安の女のふるまいを主人公がどこからどのように見ていたと解するかという問題を考え、後半では、「けこ」の語義理解の問題を考えたが、この二つの問題に対して考えられる、それぞれ二つずつの解答を組み合わせれば、二十三段の第三部には、あわせて四種類の理解のかたちが存在することになる。

まず第一に考えられるのは、主人公が家の外からひそかに高

安の女のふるまいを「かいまみ」したところ、女は「家子」すなわち一家眷属の者たち一人一人の食器に飯を盛っていた、と解する理解である。すでに見たように、中世から賀茂真淵以前までのほとんどすべての注釈や絵巻・絵入り本などが、この理解によってこの場面を享受していた。数多くの一家眷属を養っている高安の女の家の豊かさ、その女主人として食事の配分までみずから手がける女の卑俗さが、このふるまいによって強調される。女は、主人公の前では、このような自分のふだんありさまをけつて見せることなく、ひたすら上品に取り繕っていたが、主人公の「かいまみ」によって、その日常の姿が知られてしまった、というのが、この種の理解によって把握されたこの場面の内容と言ふことになる。

次に考えられるのは、主人公が「かいまみ」をした点はさきの理解と同じだが、男の目に映った光景が、「家子」すなわち一家眷属の食器に飯を盛っていた女の姿ではなく、ただ食器に飯を盛る女のふるまいであったとする理解である。すでに見たように、大和物語百四十九段には女が「手づから飯もりをりける」とのみ記されていた。この場合、主人公の存在はまだ女に知られていないので、女が飯を盛っていた食器は主人公のためのものでなく、女は、自分自身のために飯をよそって食事を

していると「かいまみ」されたことになる。

また、『十卷本伊勢物語注』には「他説三云」として『食子』トハ竹ニテクミタルヒゲ籠也』という特殊な解釈が紹介されていた。これも、あるいは大和物語と同様の理解にもとづいて語義を解釈しようとするものであったかとも考えられるが、『十卷本伊勢物語注』には続けて「ソノ貝ヲ業平ノ結構ニモルヲイガヒトリモチ食子ノ器ニモル」ト云也』と記されていた。それによれば、女は、あらかじめ来訪を予告していた主人公をもてなすために、「イガヒ」という貝を手づから「ヒゲ籠」に盛って、食事の準備をしていたことになる。この場合、場面理解の内容は結果的に、次に述べる第三の理解に近いものとなっていると考えられる。

みずから飯をよそう女の姿を主人公が「かいまみ」するといふこの種の理解は、大和物語等に、このように例が見られないわけではないが、それらの事例では、「けこ」の語は「筥子」の意に解されていたわけではけつてなかつた。『十卷本伊勢物語注』の「他説」も、すでに見たように、「筥子」説に直接するものではなく、一方の大和物語百四十九段にはそもそも、「けこ」という語は用いられていない。内容的には類似しているが、賀茂真淵以前に「筥子」という語が用いられていたわけ

ではなかつたことを、ここであらためて確認しておきたい。

三番目に考えられるのは、主人公は女のすぐ前にいて、その存在を承知のうえで高安の女が「筥子」すなわち食器に飯を盛っていたとする理解である。この場合、女は、目の前にいる主人公のために、かいがいしく飯をよそっていたが、それがかえって主人公に嫌悪されてしまったことになる。伊勢物語十四段に語られている、主人公に「せちに」思いを寄せていた「みちのくに」の女にも似た、けなげだが優雅でありえない女性の姿が、この種の理解からは浮かび上がってくる。言うまでもなく、賀茂真淵以来のほとんどすべての注釈がこの解釈によって二十三段を把握しており、この理解は現在の通説の位置を占めていると言つてよいが、その「筥子」という語は、すでに何度も確認したように、賀茂真淵以前には存在しなかつたと考えられる。通説は、その根底から否定されざるを得ないであろう。

最後に考えられるのは、主人公は女のすぐそばにいて、その存在を承知のうえで女が、「家子」すなわち一家眷属の者たち一人一人の食器に飯を盛っていた、と解する理解である。たくさんの眷属を抱え、その家の女主人として食事の配分までみずから手がける、裕福だが卑俗な女は、最初、主人公の前では、このような自分の素顔を見せることなく、ひたすら上品に取り

繕っていたが、次第に「うちとけ」るにつれて緊張感もなくなり、生活の実態を平気でさらけ出すようになった、というのが、この理解によって把握されたこの場面の内容である。すでに見たように、この解釈こそが、伊勢物語の原文に即したもつとも正しい解釈と考えられる。さきに引用した『新講伊勢物語』(吉沢義則監修・風間書房・昭和二十七年)、竹岡正夫氏の『伊勢物語全評釈』(右文書院・昭和六二年)、片桐洋一氏の『校注古典叢書 伊勢物語』の新装版(明治書院・平成一三年)など、いくつかの注釈にこの種の理解がすでに示されているが、今後、二十三段の第三部は、この読解に即して理解されなければならぬと考えられる。

## 七

沢井浩三氏執筆の『八尾の史跡』(八尾市総務部広聴課他・昭和四八年)には、かつての「河内の国、高安の郡」に属する「神立茶屋の辻」にまつわる、次のような伝説が紹介されている。

平安時代の六歌仙の一人である在原業平が、大和の龍田に来て、十三峠を越えて玉祖神社に参詣した時、この茶屋

こにはまだ生きている。それは、かつての一般的な理解を今にまで伝える、いわば由緒正しい姿の、たしかな痕跡と考えられるのである。

辻にあった福屋という茶屋の娘梅野を見せめ、その後しばしばここに通ってくるようになった。その時いつもきまつて近くの松の木から笛を吹いて、合図をしてやって来たが、ある日笛の合図をせずに来て、ふと東窓があいていたので、そこから内をみると、娘が手ずから御飯を筒にもつて食べていたので、急に興奮してしまつて笛を神社に置いて逃げ帰った。娘はそれと気づいて、業平の後を追いかけて見当たらず、悲しんで淵に身を投げて死んだという。(中略)それ以来高安の里では、東窓をつくることを忌み、

東窓をあけると縁遠くなるとのいい伝えがある。

高安の女が「手ずから御飯を筒にもつて食べて」いるところを「業平」が「かいまみ」するという点、内容的には大和物語百四十九段に近いが、大和物語には「高安」という地名は記されていない。それぞれの時代に、さまざまに姿を変えて享受されてきた伊勢物語だが、注釈書や絵巻物・絵入り本、さらには歌学書などの周辺には、より大きく姿を変えた雑多な伝説や伝承の世界が、さらに広がっていた。この伝承もまた、伊勢物語享受のひとつの姿と考えるべきであろう。かつては一般的な理解であったにもかかわらず、今は注釈書などの世界からも姿を消して久しい、高安の女を「かいまみ」する主人公の姿が、こ

(付記) 本稿は、平成十五年七月十二日におこなわれた関西大学国文学会研究発表会での発表をもとに新しくまとめ直したものである。発表の際には遠藤邦基氏をはじめ多くの方から有益なご教示をいただくことができた。これとは別に池田敬子、安達敬子、當麻良子の諸氏からも有益なお教えをいただいた。また芹澤美佐子氏には、鉄心斎文庫御所蔵品の写真掲載を快くお許しいただいた。ここに記して心より感謝申し上げます。

なお、本稿は、「日本の文学的伝統の形成と展開」を研究課題として受けた、平成十五年度関西大学学部共同研究費による成果の一部である。あわせてここに明記し、関係各位に感謝申し上げます。

(やまもと とくろう／本学教授)